

似度が低く、地上四足指背歩行よりも樹登りに適応している状態と合致する。

積雪地域におけるニホンザルの遊動の研究— 下北半島のニホンザル群の1日当り移動距離 の変異の検討を中心に—

増井 憲一 (京大・理)
鈴木 延夫 (北大・文)
足澤 貞成 (京大・霊長研)

遊動生活は、群れをなす動物が定まった生活の根拠地をもたず移動生活をおくる場合にとる生活様式の1つの形態である。この言葉は、群れ型の動物と環境との関係の2つの大きな側面を含んでいる。1つは、例えば土地利用や環境の個体数維持容量といった生態学的レベルの問題であり、1つは、例えば群れの移動方向の選択やサル对环境に対する知識、遊動時の群れの統合といった認知社会学レベルの問題である。遊動生活を理解するためには、この両面からの接近が必要であり、あるいは逆に遊動生活の分析を通じて、2つの側面を統一的に把握することができると言える。

我々は、このような視点から、下北半島北西部に生息するニホンザルの積雪期における遊動生活の研究に取り組んでいる。この地域には、M、Z、Iの3つの群れが確認されており、中でもM群については、足澤による長期の遊動追跡観察記録が貯えられている。今年度は、主としてこのM群の遊動についてのこれまでの資料のうち、1日当りの移動距離の分析を行なうとともに、のべ36日間の現地調査を行なった。

M群の1日当りの移動距離の変異について、気象条件との対応を検討し、また遊動域内の主要利用部分と周辺部分とを比較した。さらに1日当りの移動距離は、採食地や泊り場によって規定されるものであることから、それらの地点の分布について検討した。

現地調査は、1981年12月15日から翌年1月19日まで、北大ヒグマ研の綿貫豊氏らの協力を得て実施したが、M群の遊動についての追加資料を得るとともに、遊動の際の群れの個体の配置や、群れの移動の先頭付近の個体の顔ぶれの安定性などについての記録を得た。

今後、群れの遊動時における統合や、環境の認

識の問題を手がけたいと考えている。

西表島における伝統的土地利用の復原

安溪遊地 (山口大・教養)

琉球弧の最南端に位置する八重山群島における自然環境とヒトのポピュレーションの関係の諸相を明らかにすることをめざした。

研究の方法。1)生業活動への参与観察と2)聞き込みによってヒトの側からの自然環境への認知と働きかけの実態を記録した。また3)植生調査を含む野外調査と4)カラー空中写真の読みとりによって集落内から原生林にかけての環境のスペクトラムを記載した。1)~4)の結果は、1万分の1の地図上に書きこみ、数百の地名を含んだ植生図を作成した。この地図から、現在の土地利用図を作成し、さらに最近1世紀の土地利用及び植生の変遷を推定復原する作業に着手している。この復原のためには、生態学および植物社会学の知見と、ヒトの側からの自然への働きかけの歴史の聞き込みという2つの面から分析を進める必要がある。この分析を通して、ヒトが自然環境を認識し働きかけることによって自然が変化し、それによってヒトの活動自身がさらに影響されるといった、自然とヒトのかかわりのダイナミズムの一端を明らかにできるであろう。

現在までに明らかにし得た範囲で西表島西部における自然の認知と利用の歴史を述べておこう。生活環境は、集落「シマ」を中心に、前に海「スナ」、背後には「シマヌマル」という移行帯を以て樹木の生えた地帯「ヤマナ」がある。これらはさらに細かく分けられ、そのひとつひとつが、漁撈、狩猟、採集、牧牛、畑作、水田耕作といった伝統的生業と結びついてきた。水田だけをとり、これを区分するための30以上の語彙がある。西表島の生業活動の特徴として一人が利用する空間の広さとレパートリーの多様性がある。この広さと多様性は、ここ数十年来狭められる傾向にあるが、伝統的土地利用に対する島外からの制限の強化のほかに、自然環境の多様性の減少をもこのことの原因として挙げることができよう。